

学校に通学していました。姉の方は、楊樹房で亡くなった私の弟と同じ年で、終戦の時は小学六年生、弟は二年生でした。親代わりの叔父さんも暴動後「お前たちは一緒に日本に帰るより、ここに残った方が幸せかもしれない」と友人の中国人に二人を託したそうです。姉弟は叔父、叔母に取りすがり泣きわめいたという事で、M氏も後ろ髪をひかれる思いで壺蘆島から博多港に引き揚げたそうです。その後いろいろと手を尽くして姉弟に呼びかけたそうですが、何の音沙汰もなく時が流れました。

昭和五十七年三月、中国の弟の方から「M叔父を捜してください」と外務省を通して岩手県に連絡が入ったとかでしたが、既にM氏は三十三回忌を迎える故人となっていました。

昭和六十三年五月にM氏の長女Hさんは、この中国のいとこに会うため、普蘭店会有志十四人と共に大連―普蘭店への旅をし、無事いところにも会え、中国人の養母にも会って、その温かい人柄に接し頭の下がる思いがしたそうです。姉の一家は山東省で農業を、弟は

普蘭店で「自来水公司」という会社に勤務しているとのことです。

平成二年十月、東京九段会館で弟さん一家の招待を兼ねて総会を開き、歓迎の一時を過ごしましたが、姉さんは事情があって来日できませんでした。皆さんで気持ちを出し合って饞別をしました。大陸でしっかりと根をおろした二家族に幸多かれと祈るばかりです。

「戦争っていやだね」

三歳児のつぶやきから

神奈川県 戸ヶ崎 英子

三棵樹で乗り換えた車両は、帝政ロシア時代の古風なもので、私は相客のいないコンパートメントに一人で落ち着いた。映画に出てくるような優雅な気分に浸っていた。汽車は小さな振動音を発しながら、静かにそしてゆっくりと走り出し、徐々にスピードを上げていった。

開け放された窓からは、さんさんと降り注ぐ真夏の太陽とともに、そよ風がかすかなタールの匂いを運んできた。

沿線に点在する部落では、畑作業をする農夫たちや、裸で駆け回っている子供の姿が、この広い大地に溶け込んで、いつもと変わらないのどかな風景を醸し出していた。

遠くの方に赤茶けた丘陵を背に高い煙突が見える。去年の夏、この地を旅した時、まさ子さんが「大きな声では言えないけれども」と前置きして、「あそこで、戦争を終わらせるくらいすごい化学薬品を作っているのですって」と教えてくれたが、もうできたころだろうか、と漠然と考えた。

私は五常までの三時間余りの汽車の旅を、何をすることもなくボンヤリと車窓を眺め、ひさ江さん宅で過ごした三日間のことを思い浮かべていた。

昭和二十年八月六日、私は浜江省呼蘭に住んでおられるひさ江さん宅を訪問した。ひさ江さんとは二年ぶり、ご両親とは十年ぶりの再会だった。

私とひさ江さんは、父親が旅順刑務所に勤務していた関係で、刑務所の官舎に住んでいた仲良しだった。その夜の四人の会話は、当然その頃のこと及び、思いう話は次々と夜がふけるまで続いた。

翌日、ひさ江さんの勤める公学堂に案内された。夏休みで静まりかえった校舎に日直の教師が一人いて、教室の鍵をあげてくれた。教室や廊下には重なり合うように作品が展示してあり、特に条幅の書の中には小学生の作品とは思えないほどの見事なものがあつた。

いつの間に習得したのか、ひさ江さんと満人教師の会話は流暢で、私には理解できなかつた。満人教師は、私に向かつてジュエスチャーをまじえながら「彼女は、この学校唯一の日本人教師で、とてもよい人だ」と話してくれた。

帰り道、子供たちとの生活を生き生きと楽しげに語るひさ江さんの言葉から、満人の子弟教育に情熱をかけておられる様子を知り、私にとってはうらやましくもあり、本当の意味での日満親善の精神が生かされていると思つた。

私は旅順で生まれ、小学校六年生まで元宝町の官舎に住んでいた。ひさ江さんとは官舎が離れていたために、旅順第一小学校に入学するまで知り合うことはなかった。官舎からは、六人が一年生として入学したが、ひさ江さんとは特に仲が良く、登下校はもちろんのこと、お互いの家にも行き来して、家の門限ぎりぎりまで遊んでいた。

ひさ江さんは小学校四年生の時に転校したので、二人の交際は途切れた。けれども、一年前に病氣療養のために一時横浜に帰った父の容態も思わしくなく、旅順で生活するよりは、母の兄弟の住む奉天に移転したほうが何につけても心の支えになるだろうとのこと、私が旅順高等女学校二年生の五月中旬に、私たちが母子は奉天に移転し、私は奉天浪速高等女学校に転校した。そこに凶らずもひさ江さんが寄宿舎生として入学しており、再び二人の交際が復活した。

昭和十七年、女学校卒業後、大連のデルコ洋裁学校に進学していたひさ江さんが、夏休みの帰省途中に我が家に寄られた。二人で恩師を訪問した折に、恩師か

ら「二人とも職業についていないのなら、九月から浪速高等女学校で教員養成講習会が開催されるから、受けてみないか」とのお話があった。

昭和十六年十二月の大東亜戦争から日本の戦況は不利になるばかりで、一億総決起の名のもとに、男性は戦場へ、女性は軍需工場に徴用されるという時代だったので、二人で相談をして受講することにした。講習を終え、教員の資格を取得し、ひさ江さんは呼蘭の公学堂に、私は奉天の加茂在満国民学校に奉職した。

昭和十九年十二月ごろ、奉天にB29が飛来した。空襲警報で児童は帰宅させ、静かになった校庭に出て空を見上げると、南方の上空にキラキラする物体が飛んでいる。何だろうと思う間もなく、「シュル、シュル」という音がして黒い塊が落ちてきた。「空襲だ、伏せろ！」と、だれかが叫び、みんな一斉に素掘りの防空壕に飛び込んだが、一瞬の出来事で爆発音がしたかどうかとも分からなかった。まだ土ぼこりのしている防空壕から出て驚いた。運動場の隅に直径十メートルほどの穴があき、校舎の窓ガラスが全部割れて黒々と見え

ていた。

帰宅すると、親せきの朝子さん親子が、部屋の片隅で震えていた。自宅の防空壕は直撃弾を受けたが、予感があったのか、組長さん宅の防空壕に避難して助かったとのことだった。まさかと思っていた米機の空襲で、奉天の市民にも戦争の危機が現実のものとなってきた。

このころから親せきの間でも疎開の話がでて、伯母と俊章（末弟で幼稚園児）、洋子（妹で小学六年生）の疎開先として、近くて安全な所を探したが、安全な場所がどこなのかも分からなくなっていた。

取りあえず貴重品などを浜江省五常の大竹家（縁戚にあたる）に預けることとなり、四月に学校を退職していた私はその役を引き受けることになり、二十年五月半ばを過ぎたころ私一人で五常に向かった。

そんな経緯から、同じ浜江省の哈爾濱駅から松花江を隔てた呼蘭にひさ江さんを訪ねたのだが、「もう一晩ぐらい泊まっていらっしやいよ」と引き止めるひさ江さんに、近いうちにまた会いましょうと別れたのは

八月八日のことだった。このときはまだ、日ソ不可侵条約を一方的に破ってソ連軍が不法な侵攻をして来るなど、想像だになかった。

八月十日が過ぎたころだったと思うが、私は友人の手紙に入れる葉を拾うために白樺林に行った。若木で葉もまばらな林には、雲一つない青空から、太陽がじりじりと照りつけていたが、いつも近くの畑で仕事をしている満人の姿もみえず、不気味なくらい静かだった。家に戻るとおばさんが、「英子さん、どこに行っていたの？ 国境でソ連軍と戦闘が始まって、女、子供は危険だから外出しないようにという知らせがあったのよ」とのことだった。何しろこの町は、夕方五時過ぎでなければ送電されず、ラジオも雑音で聞き取れず、情報の伝わりの遅い土地なので、県公署でも正確に状況を把握しているわけでもないだろうし、また、軍の機密で流せない情報もあるだろうから、むしろ満人の使用人が持つてくる情報の方が真実に近いこともあった。

八月十五日の夜、日本が無条件降伏をしたとの放送

があった。「停戦であって負けたのではない」「いや、無条件降伏だから負けたのだ」と集まった人々の喧々ごうごうの議論も、負け戦をしたことがないという教育を受けている日本人のプライドなのか？ どちらにしても負けたに違いないのだが……。

家の向かい側の守備隊の衛門には衛兵の姿が見えなくなり、同居している福与さんと太田さんが見に行ったが、北進したのか南進したのか？ 管内には何もなかったようだ。いつの間に、どんな方法で出発したのだろうか、もう住民を守ってくれるものは何もない。

二、三日後、満人の案内でソ連兵が入ってきた。マンドリンと呼ばれる自動小銃を構えて何かを出せと言っているようだった。使用人が、トイレの床下に隠してあった時計などを渡すとおとなしく引き揚げた。

翌日、薄暗くなったところに、「バーン、バーン」という銃声があり、家の瓦がはじけ飛んだ。おぼさん、まさ子さん、進ちゃん、太田さんの奥さんと私は、裏の畑に身をひそめた。遠方で「ワァー、ワァー」と叫ぶ声が聞こえていた。恐ろしさにみんな抱きあって

いたが、このときには、これで死ぬのではないかと思つた。やがて静かになつたので家に戻り、その後は息を殺して過ごす日が続いた。

大竹家は資産家で、かなり広い敷地があり、通りに面した入口付近に使用人（満人）の家と物置小屋があり、三十メートルほど奥まつた所に住居、家の前庭には六、七本のスモモの木があつた。家の造りは各部屋がオンドルになつているので、冬にそなえて家の周りには二メートルほどの薪が積まれており、通りからあまり目立たない作りになつていた。けれどもこの土地では「大人（お大尽）」と呼ばれており、いつ襲われるか分からないので、福与さん、太田さん二人の男性がいたことは力強かつた。

五常在住の日本人は少数で、出征した教員の代理で一時期勤めた小学校は、復式教育を行つていた。私が受け持つた三・四年生は、十人足らずだったように思う。短期間だったので、あまり記憶にないが、あの子どもたちは、今どうしているのだろうか？

その後、一度八路军の将校が来て何や彼やと物品を

持っていったが、略奪に遭うようなことはなかった。

何日かたって、軍人や開拓団の人々が逃げてきた。

軍人はどこで手に入れたのか、白い中国服を持っていた、軍服と着替えて南方に旅立っていった。おにぎりを作って送り出したのだが、白い服が気になった。軍服はどのように処分したのかは知らない。

開拓団の人たちは満人の襲撃に遭い、足手まといになる乳幼児や老人を銃で殺した人、置き去りにしてきた者などが大変に悲惨な思いをして、何日も何日も歩き、この地にたどりついたとのことだったが、福与さんのお母さんは、「この子を死なしてなるものか」と、身体の不自由な男の子（小学生だった）を背負って来られた。

九月になって、綿入れの服と靴を使用人の太太（夫人）に依頼して作り、奉天に帰る機会を待った。

十月中ごろだったと思うが、福与さんの弟さんが訪ねて来られた。この人は、以前から満人の家庭で生活し、中国語を覚え、生活習慣から日常の動作まで満人と変わらないばかりか、本人も満人になりたいという

願望を持っている方であった。私は一人では心細いので、この人に奉天まで送ってほしいと依頼した。

承知はしてくれたものの、福与さんの弟は二、三日姿をみせなかった。何しろ飄々とした感じの人なので不安に思っていたところ、「明日、出発する」と言われて来られた。

あさっては奉天でみんなに会えると思うとうれしくて、いそいそと出発の支度をした。支度といっても荷物は持たない約束なので、下着にポケットを作り現金を入れるだけのことだが、何だか気持ちはワクワクしていた。ところが、夕方から弟さんが高熱を出してうなされるような状態になった。明日の出発はあきらめなければとがっかりした。

その夜、使用人の手配で満人の医者が見守る中で、医者はこめかみにメスのようなもので傷をつけ、祈禱師もどきの気合を入れると、こめかみから黒みがかった血液が流れ出た。驚く我々に医者は言った。「悪いものがみんな出たから明日はよくなる」。医者言葉通りに弟さんは回復した。二人は予定通り、

駅に向かった。

小さな駅には大勢の満人がいたが、列車に乗る様子でもなく、ただガヤガヤと集っているだけのようだった。

人ごみをかきわけて改札口を通り抜けた。「彼女は日本人だ」という声が聞こえたが、何事もなく汽車に乗り座席につくことができた。

三棵樹の駅に到着したが、ここで南下する列車が運行されていないことを知った。駅の助役さん宅に行く、福与さんの三番目の弟さんと若い駅員が助役さん宅に寄宿しており、現在は外出もままならぬ状況とのことだった。この日から助役さん宅に一カ月近くもお世話になった。初対面の私を寄宿させてくださった助役さんご一家のご厚意がなかったならば、私は、開拓団の人々が遭遇したのと同じ軌跡をたどっていたかもしれない。この助役さんのご恩は決して忘れられないことであるが、今、万分の一のお礼もできなかったことには、無念の気持ちでいっぱいである。

十一月に入って、助役さんのお手配で、南下する列

車に乗ることができた。乗客は大部分が中国の軍人で、大声で中国語を話しあい、お互いの座席を行き来していたが、だれも私たちをとがめる者はいない。ほど緊張していたのであろう、この間のことはほとんど覚えていない。

混雑する奉天駅前で、ぼろぼろの服を着て真っ黒に汚れた少年たちが、物ごいをしていた。彼らが日本人であることを知ってショックだった。その時、この子たちのために力になってあげたいと強く思ったが、それは現実を知らない甘い考えであったことを後で知ることになる。

駅から琴平町の家まで十分足らずだが、この間のこととは思いつけない。家に通じる露地は、頑丈な木戸で遮られ、周りの家々の窓には板が打ちつけられ、まさにゴーストタウンのような静けさで、この瞬間、もうだれもいないのではないか？という不安と恐怖を覚えた。

通りに面している二階に向かって幾度も大声で叫ぶと、妹の洋子が小窓から顔を出し、階段を下りる音が

恐々の日々を送っていた。

また、ある友人は、鉄西の工場街に住んでいたが、暴動が身近にせまった八月下旬ごろから一カ月近くも、屋上で夜を明かしたという。

私が奉天に帰ったころは、ゲーペーウー（ソ連軍の憲兵）が取り締まりを始めたので、比較的落ち着いたままにいた。

昭和二十一年正月ごろには、この街も平静さを取り戻し、私は、営口から避難してきて、一度我が家を訪ねて来られたと母から聞いた友人を捜しに、避難民の収容所になっている春日小学校に行った。窓に板をうちつけ、廊下側に一カ所小さなくぐり戸がついていた。この中で何人ぐらいの人が、どんな生活をしているのかはうかがい知ることはできなかったが、マイナス二十度以下の冬をどのように過ごしているのかわかるか。一教室ずつノックして友人の消息をたずねたが、手がかりを得ることができなかった。避難民の方々の中には、衣食住劣悪な環境と発疹チフスの流行で死亡する人も多く、遺体を荷車いっぱい積んで通

りをゆく光景に、敗者の悲哀を感じつつ手を合わせることはつらいことであった。

休業中であつた伯母の経営する公衆浴場は、ソ連の将校用に使わせて欲しいという要望があり、ロシア語・中国語共に自由に話せる伯父の交渉で、隔日交互に使うということで折り合い、一日おきに営業することになった。電気、水道の使用ができるうえに現金収入があつたことなどが、大家族の生活の糧となった。

夏も近づいたころだつたと思うが、ある日、小銃を持った兵隊たちがトラックで来た。十五、六人もいただろう。将校らしい人が全員外に出るように指示した。小銃の前に立たされたときの気持ちは、なぜこのようなことになるのか分からず、安然とする中、恐ろしさに足が震えた。伯父の話によると国民政府軍が接収のためにきたのだつた。

翌日、「国民政府五十二衛生隊」と書かれた真新しい木札が入口にかけられた。

二人の警備兵は別棟のボーイの部屋に常駐することになり、周さんと張さんという二人が詰めていた。周

さんは、湖南出身で言葉は通じないが、年齢も若く我々とも友達になった。警備といっても特に用事はなく、毎日遊びにきて、麻雀やトランプに興じた。彼は温和で優しく、弟の俊章が高熱を出した時には、部隊から注射液などを持ってきて、心配そうに付き添い、回復したときには我がことのように喜んでくれた。また、伯母宅に寄宿している社員の赤ちゃんをあやしたり、抱いたりしていた。

張さんは北方人で、外出することが多くてなじめなかつたが、そのうちに見掛けなくなつた。周さんの話では、失恋をして自殺したとのことであつたが、真偽のほどは定かでない。

一日に二度、当番兵が食事を運んできた。二人では食べきれないからと私たちにも分けてくれたが、なかなかおいしいものであつた。彼らは私たちが供した物には決して手をつけなかつたが、軍規が厳しかったのであろう。

このころになると、ソ連兵の姿を見ることもなく、引揚げのうわさも出ていたので、日本人も千日通りで

物売りをするようになった。

昭和二十一年七月七日、琴平町の日本人は北奉天駅に集合し、引き揚げることになった。急なことだったので、十分な準備ができないまま持てるだけの物を持って家を出た。

母は、洋子が病気になるので残ることになつた。町内全員が発病するのに病気の妹を抱えてどんなに心細いことだつただらう。私たち姉弟は後ろ髪を引かれる思いで、洋子に「早くよくなって帰ってきてね！」と別れたが、医者から「結核性脳膜炎で治療の見込みはない」と知らされていただけに、こんな別れをしなければならぬ悲しき涙が止まらなかつた。

周さんの手配で、親類の朝子さん宅に移つた洋子は、「早く日本に帰りたい」と言いながら一週間後に息を引き取つた。この知らせは、まだ列車乗務についていた、伯母の同郷人の国崎さんによって、壺蘆島の收容所にいた私たちに届いた。

将来は、声楽の勉強をしたいと希望を持っていた妹洋子は、十五歳の若さで天国に旅立つた。その無念さ

を思うと、戦争は生き残った者にも、生涯の遺恨を残すものなのだ。

身動きのできない有蓋車は、途中、幾度も停車を繰り返しながら、息苦しさど蒸し暑さの中で、ともすれば生まれてはじめての絶望感に落ちている、長い長い道のりであった。

壺蘆島で、千円以上の現金を隠し持つ者が一人でもいれば、全員の帰国は許されないとこのうわさが流れた。

満人から買った食品を食べた人がコレラになり、一カ月近くも足止めされた。その生活は、敗者の悲哀をつくづく感じさせた。

八月十六日浦賀に上陸、ようやく足を伸ばして寝ることができた。

日本での生活の第一歩を踏み出した母の故郷佐賀県では、食糧はあったが、私たち姉弟はなじめず、一時、父や弟が過ごした横浜に移った。親類などが幸い戦災に遭わずにいたが、長く世話になるわけにもいかず、住まい探しをしたが、焼け跡にバラック建てでも多

く、進駐軍のキャンプなどもあって、家はみつからなかった。

横浜では主食の運配続きで、やみ米やサツマ芋等で雑炊を作り飢えをしのいだが、一週間遅れの配給の列に並んで、今日はこれで終わりですと打ち切られたときは、やりどころのない憤りを覚えた。

母は昭和三十一年九月下旬、小さな骨つぼを抱いて帰国した。疎開して三崎に移った菩提寺でささやかな葬儀をすませ、父の眠る横浜の墓地に納め、妹もようやく父の懐に抱かれることになった。

私には教員の資格があったので、教員不足の折から、市内の三カ所の小学校からお声がかかったが、小学校入学から敗戦まで終始戦時教育を受け、短い期間とはいえ、そのことに便乗した自分自身の反省と、何事も無かったように教育方針を変えた文部省に不信感を抱き、自分は教育者に向かないと主張してお断りした。幾度も訪ねてくださり、お話をしてくださった、近くのY小学校の校長先生には心から申し訳ないと思っ

母は、磯子や三崎に魚の買い出しに行ったり、持参した和服を売ったりして、ふがいない私たちのために、慣れない力仕事で心身に負担を掛けていたが、姉も私もなかなか職に就くことができなかった。昭和二十二年、姉が結婚、二人でお手伝いしていた引揚援護協会の仕事も辞め、写真屋の事務員なども長続きせずにはいたある日、新聞の二行求人欄に「保育園保母募集」の広告を見た。保育園といえ、小学生のころ父と旅順の鎌倉保育園を訪問し、寄付の物品を持参した記憶があるので、孤児院（現在の児童養護施設）をイメージして子安にある保育園に行った。そこは私の考えとは違い幼稚園のようなところであった。

園長夫妻の人当たり良さに、意に反すると思ったが勤めることにした。以後園児が増えるにつれて保母が不足した。母も勤めるようになり、私たちは園長の好意で保母資格の取得、住宅の供給などで一応の生活を確保した。以後三十七年間、関連施設で保母一筋の人生を歩むことになった。

戦後何十年かたって、情報が自由に伝えられるよう

になって知ったことには、呼蘭在任の日本人は、敗戦後すぐに亡くなられたとのこと。あれほど満人の子弟教育に熱意を持っておられたひさ江さんだったので、なぜ……。別れたときのあの笑顔が、今でも私の脳裏に焼きついている。私は、ひさ江さん一家がどのようなして亡くなられたのか知るのがこわい。

また、平房の、あの高い煙突は、恐ろしい細菌兵器の製造と人体実験が行われていた、「七三一部隊」であったとは。この中には学校もクラブもあり、マルタと呼ばれる捕虜と、マルタ従事者の住まいや遊興施設も揃っていたとか、何だか信じられない思いである。

人は多くの人との出会いと別れを繰り返す中で、そのかわりの時間の長短に関係なく、一瞬の間でも心に残る人がいる。三棵樹の助役さんご夫妻、二人のお子さん、福与さん、周さん。激動の中お会いしたこれらの方々は、今どうしておられるか知る由もない。

戦後五十年たって、横浜の税関から、弟妹の郵便貯金通帳と定額儲金證書が十通と生命保険証書が送られてきた。

国幣五拾圓整、五百圓整などと印刷された文字と、定額儲金證書の表紙には「必勝儲金」と、大きな印が押され、まだ幼かった弟妹が、お小遣いをさいて貯金したものであろう。

今、これらのものが、空しくも悲しい遺品となって私の手元にある。

昭和二十三年、保母となって受け持った三歳児が、真夏の乾いた園庭におしっこで絵をかきながら、「戦争っていやだね」とつぶやいた。大人の口まねだろうが、まだ記憶の生々しいときだったから、私の胸にずしんと響き、今でもこの一言は、耳たぶの奥深く残り、折にふれ、この言葉が頭をよぎる。

家族全員を見送り一人残された私は、近々二度目の四国遍路に旅立とうとしている。

父と母の軌跡を訪ねて

神奈川県 佐藤 益躬

わが家では戦後外地から引き揚げたとき、アルバム・日記・書簡などほとんど大部分の記録を失ってしまった。母が五人の子供たちが亡き父のことを知らない哀れさを思い、遺骨とともに持ち帰った父・延四郎の日記帳の一部分がわずかに残っているだけだった。その日記は昭和六年の栃木師範学校の卒業式で始まっている。

昭和六年三月二十四日（火）晴

今日は卒業式だ。永久に記念すべき日、なんたいおろし男体風が冷たい。

九時二十分、卒業生着席。総代として最前列に席を占めた私は、実に感無量で今までの努力の結果と思うと嬉しかった。在校生・父兄・来賓着席、視学及び知